

ご挨拶



日本顔学会会長 奥水大和 (中京大学)

2012年1月1日をもって日本顔学会会長を務めることになりました。付託された責務をどのように考えそれを如何に受け止めたらよいか、身の丈を超えて重いものがありますが、精一杯にこのお役目に務めて参りますのでよろしくお願い申し上げます。この機会に、顔学会について感じていることを自己紹介的に少し述べさせていただくことも併せてご挨拶を申し上げ、今後に向けて会員諸賢からのご高配とご理解を賜りたく、重ねてお願い申し上げます。

まず、顔学会という場の新鮮さは何なのか？

日本顔学会 JFACE の発足時、1996年のころに受けた感覚「こんな学会、みたことない！」は、新鮮で鮮烈でした。そして、気持ちのどこかで、これはもしかすると一過性のものかもしれないとも密かに思った人も少なからずいたと思いますが、私もその一人でした。はたして、断固として一過性ではありませんでした。

発足時から数えて16年もの歳月が経った、その持続性が何よりの証拠です。それも、この間、会員も現在800名にのぼり、2000年の大顔展のすごい実力と存在感、2005年愛知万博での顔学会のプレゼンスと高い貢献度、FORUM 顔学の着実な充実ぶりにおいて、新鮮な輝きを少しも失っていないからです。そして16歳といえば、学会年齢としてもはや立派に成人、元服であります。このように顔学会 JFACE を産み育てられた、香原初代会長と原島前会長の“透徹した卓見”と“顔学会愛”に深く敬意と謝意を共々に表したいと思います。

さて、新潟開催のフォーラム顔学2011の閉会式で、『法事のような学会』を目指しましょう、なるご挨拶を致しました。顔学会の存在意義と必要について、そのように言うてよいかと思ったのでした。顔学会 (Academic Society) が法事のような存在であるなら、この社会 (Society) に身をおくことに動かしがたい必要と重要な意味があることは確実なのです。そして問題は、その核心を私たち自身がより明瞭に見定めていくことが大事なかと思えます。『法事』と同じように、顔学会には、学術における佳きことはもちろん面倒なこと一つも欠けることなく、十全な課題とそれを扱う場とそれに関心をもつ人々が間違いなく集積されているからです。

顔学会の堅持すべき、佳き性格について

私ごとですが、電気学会、精密工学会、電子情報通信学会、情報処理学会、IEEE など10ほどの学術学会の学会員で、画像処理・センシングの諸課題と今日も格闘しています。そして、似顔絵研究がきっかけで顔学会発足の時からずっと顔学会 JFACE 会員です。上記の諸学会と顔学会 JFACE とは何かが根本的に違い、そしてそれこそが却って大きな意味があ

るように感じています。では、この差異と意味の源流はどこから発しているのでしょうか。

- ① 会員の専門分野の多様性のこと 顔学会 JFACE 会員の身上、出身の多様性は、学会として自然なことか不自然なことか。学術の分野分科は便宜であったはずが、その便宜が学術社会構造を強く縛った。したがって、この縛りは自在に解き放つことにだけに意味がある。理系／文系、年齢、性別などなど、どのような切り口からもみても、顔学会には同じような特徴が見えてくるのではないのでしょうか。
- ② 顔学会 JFACE で扱う諸課題は、心身科学の両方に跨って向かい合うべきものばかりで、物質科学の学術世界にだけにもココロ科学の分野にだけにも閉じ籠ってられない。私の身の周りのことでは、似顔絵ロボット開発では精緻をきわめたカメラとコンピュータを使いますが、これらを突き詰めたところに、『似顔絵がそっくりだ』というヒトの感覚とか意識の品質を捕まえられないのです。つまり、物質科学視点からの還元的説明に努めれば務めるほど破綻するのです。顔学会 JFACE の学問的性質は、延いては情報科学に代表される諸学問の性質は、物質科学・技術だけでなくココロ科学・技術でもないようです。

というわけで顔学会 JFACE は、細分化に細分化を重ねてきた学会という学術社会の中にあって、『顔』という包括的呼称のみを手掛かりにした、細分化も分科もない学会、すなわちメタ学会、故郷的学会のような学会であろうとして誕生したのだと思います。よって、顔学会 JFACE 会員が一年に一回相集うフォーラム顔学は、世知辛い日常から積極的に離れて故郷に戻る、『法事のような学術集会』なのだと思わなければならぬと思うのです。

そうでないと、村や地域や血縁を忘れた社会がろくなものではないように、学術学会が少しもイキイキする気配がないからです。顔学会 JFACE は、狭くて息苦しい、分野・分科の縛りから解き放たれて、新鮮な生き生き感を醸してまいりましょう。

このようなことも考えながら、顔学会の運営の一つひとつに努めてまいりますので、改めてご理解とご高配とご助力をこころよりお願いしまして、ご挨拶といたします。

(2012年2月7日)

=====

興水大和：巻頭言：学術学会JFACEは、どう歩みを進めたらよいか？

-JFACE学会の学術的本性に関する一論考-

-A Discussion on What JFACE is in Academism-

日本顔学会誌、Vol. 12, No. 1, pp. 1-7 (2012年10月13日)